



共同研究 「アジアの社会遺産と地域再生手法」公開講演会報告

近現代モンゴルーウランバートルにおける定住と都市

研究分担者 神奈川大学建築学部特別助教 柏原 沙織

「アジアの社会遺産と地域再生手法」グループでは、2023年2月28日に神奈川大学横浜キャンパスとオンラインのハイブリッド形式で公開講演会を開催した。講演者として東京工芸大学の八尾廣先生をお招きし、「近現代モンゴルーウランバートルにおける定住と都市」と題して、モンゴルの首都ウランバートルの歴史の変遷に始まり、周辺に広がるゲル地区での定住生活、遊牧の伝統を持つモンゴルの人々の定住の感覚や近代的な社会主義標準アパートの住まい方等についてお話を伺った。

最初に、モンゴル国と首都ウランバートルの概況について解説があった。同国は日本の約4倍の国土面積を持つ一方、人口は340万人、人口密度は日本の170分の1とのことである。一年を通した寒暖差が非常に激しく、冬季はマイナス23度、夏季は40度まで上がることもある。モンゴルは17世紀から20世紀初頭にかけて清朝の支配下にあったが、その後1920年代から1991年までは社会主義国となり、1990年に社会主義体制から市場経済体制に移行、1992年に民主主義国となった。ウランバートルは東西に延びる谷筋に位置しており、東西約20kmに渡って広がる都市である。元々はチベット仏教の移動寺院が前身であり、宗教都市が起源である。現在は全人口のうち48%が首都ウランバートルに集中している。

続いてゲル地区の状況について説明があった。ゲル地区は、ウランバートルの中心地から北方の都市計画外エリアに広がっている。ゲル地区は社会主義時代に首都の労働力不足を補うため、地方から移住させた労働者のうち、アパートに住めない余剰人口を計画的にゲルに住ませたのが始まりである。

ゲル地区が固定化した背景に、2002年に制定された土地私有化法がある。歴史的に個人による土地所有の制度がなかったが、同法では1世帯あたり700㎡の土地を無償で所有できる権利を保証した。さらに2008年の改正では、国民1人あたり700㎡の所有権が保証された。この法律により、土地を不法占拠した場合でも一定期間住むと自分のものにできるようになった。ほぼ全ての世帯が土地所有権を持つ点で、ゲル地区は通常のスラムと大きく異なっている。

20世紀前半から社会主義時代を経て、現在に至るウランバートルの都市の変化の説明に続いて、八尾先生ご自身の長年にわたるゲル地区の住居調査をもとに、

現代モンゴルにおける定住の様相について解説があった。3,000年に渡って遊牧生活が根強くあったモンゴルでは、「定住」の感覚や概念が、農耕民族である日本人とは明らかに違うという。草原におけるゲルを用いた伝統的な遊牧生活と対照的に、都市では社会主義時代にルーツを持つ、近代的なアパート群での定住型の生活がある。ゲル地区はその中間に位置付けられ、どこことなく仮住まい的な感覚を持った定住の姿が、草原と都市のバッファゾーンに存在している。

八尾先生の研究室では、2013年からゲル地区において実測調査と住民へのヒアリング調査を実施されてきた。ゲル地区の基本的な居住形態は、比較的広い敷地を高い木柵(ハシャー)で囲い、その中にゲルや固定住居の「バイシン(一般的な建物)」を建てて住んでいる。元々遊牧生活に最適なゲルは定住生活に向かない上、冬季の厳しい寒さもあるため、人々は蓄財してバイシンを自力で建設して居住するという。それと同時にゲルは住まい方の流動的な変化に対応するため、定住生活においても便利に使用されている。例えば親世帯は固定的な建物であるバイシンに住み、結婚して独立した子どもたちはその家族ごとに敷地内に別のゲルを建てて住むが、いずれ出ていくことが前提であり、子ども世帯が出た後に親世帯が増築するといった形がとられる。その他にも、ゲルは生活を補完する便利なツールとして活用されている。シャーマンの祈りの場、仕事場、家内制手工業の工場、子世帯の住まい、余裕のある人は夏のリビングとして、また、貸家として収入を得ている人もいるという。2時間程度で組み立てられる非常に合理的な建物でもあり、ゲルは今後も使われ続けていくと考えられる。

バイシンの間取りは、玄関-キッチン-「トムウロー(家族共用の大きな部屋)」という繋がりが軸となっている。これは冬季の生活ニーズを反映したもので、家の外にあるトイレの行き来などで頻繁に出入りする際、防寒靴の着脱をするスペースとして、ストーブのあるキッチンが土足も許される中間領域となっている。玄関から直接冷気が入ってくるため、住まいの領域であるトムウローを最奥にすることは合理的な配置である。比較的低所得な人々が蓄財して自力で建てているため、バイシンは規模が小さく、トムウロー1室のみの場合も多いが、料理・食事、読書・勉強などの生活場面が重複しているほか、特にトムウローではあらゆる生活場面

が展開している。こうした様々な生活場面は、小さなツールや机を移動して切り替えられている。

一見その形態が異なるゲルとバイシンだが、室内の図式は非常に似ている。ゲルでは風除室となる玄関に入り、中央に光が落ちてきて、そこを中心に空間が分割され、右手に調理の場所、左手から座る場所を兼ねた低い寝台が並び、最奥がヒエラルキーが最も高い場所で、主人の席や仏壇が置かれる。バイシンは南側に開口部があり、天井は低く抑えるが、多くは入口が東南側に配置され、入ると右手に調理場、入口から対角線状の奥にテレビ台や仏壇が置かれていて、ゲルと同様の感覚でつくられていることがわかる。

どの家もかなり広い敷地を持っているが、利用されている土地はほんの僅かである。調査された範囲では、平均敷地面積は約500㎡、建蔽率は12%程度だった。土地利用があまりされない理由として、乾燥気候で一度土を掘り返すと草が再生しづらいため、大地を尊重する意識が根強く、元々土地を加工するという概念がないことが考えられる。例外的に、日本での生活経験を持つ人や土を掘る技術を知っている人々は植樹、菜園、楽しみのための庭などの土地加工を行っている。このように余裕ある敷地を利用する住民は少しずつ増えており、定住生活が長くなる中で、土地の緑化や自宅での野菜づくりなどの活動が増えていくことが予想されていた。

高い柵で囲われた敷地外への意識は薄く、コミュニティ意識も日本人とは全く感覚が異なるという。住区ごとに地区長はいるものの、多くは比較的希薄な関係性とのことである。ただし国際援助により道路改善を行うことで道路への意識が高まるなど、柵外への気づ

きが増えていくことで、ゲル地区はより住みやすい地区となる可能性も指摘された。

最後に、ゲルとは対極に位置づけられる社会主義時代のアパートの住まいについて直近の調査内容が共有された。社会主義時代のアパートは年代ごとにデザイン・構法が変遷しているほか、平面図からは明らかにモンゴルのではない間取りが見てとれる。ゲル地区での調査で見られた家族共有の場所を繋げる使い方とは反対に、アパートの間取りは完全に独立した部屋同士を扉で仕切り、それらを廊下で繋ぐ構成である。モンゴルの人々が好む家の使い方とは異なるため、扉やキッチンの変更がよく見られるという。例えば個室、子供部屋、寝室だけは扉がつけられるが、廊下、ホール、キッチン、トムウローなどの家族共用のスペースはできるだけ扉をなくし、大きく開口部を広げて使われているケースが多い。また、ゲルではキッチンと食事の場は同じ場所にあるため、アパートで離れている場合には違和感が感じられたのか、キッチンの位置を強引に変更している例もあった。

以上の講演内容を踏まえ、質疑応答が行われた。質問では、定住生活でゲルを使わなくなった理由、ゲルの一般的な配置原則について、高い柵で囲われた住まいの外部・内部の感覚、世代交代が起こってもゲルが使われ続けるという見通し、社会主義時代のアパートのメンテナンス状況について問われたほか、ゲル・バイシンの平面プランの他地域との類似性・関係性等についても活発な意見交換がなされた。

今回の講演を通じて、遊牧の伝統を持つ人々の住まい方から、アジアにおける多様な「定住」の価値観について理 を深める大変有意義な機会となった。